



渦巻く

# 一步先のあなたへ

永田 和宏

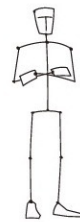


## 7 先生には質問してみる

大切なことは質問を引き出すこと  
教科書にはないぎりぎりを伝える  
それが魅力的な講義になるはずだ

私は穏やかな先生であると自分では思っているが、数年前までは、年に一度くらいは大爆発していた。教室のミーティングの場である。机を叩いて、「みんな、やめてしまえー」などと怒鳴っていた。それは決まって、質問が出なかった時である。成果発表の場で、発表に対して質問が少ないとき、我慢ができなくなる。質問をしないのなら、こんなところへ来て聞いている必要はないではないか。人の成果発表を聞くとき、それを自分の仕事として考えることができなければ、成果発表会などという会そのものが無意味なのである。その結果にはどういふ意味があるのか、どういふ不備な点が残されているか、目的の達成には別の角度、違った

方法があるのではないか。自分ならこう考える、こうやってみると、自分の仕事として考えること。人の発表をただ聞いているだけでは何の意味もない。質問は発表者自身に示唆を与えるだけでなく、それは発表された新知見を、自分のなかに組み込んで、知識の展開を図り、新しい知の体系を獲得してゆくことでもある。



そんなとき質問が噴出するのは当然なのである。私のラボでは、質問が出ないのは何も聞いていないのと同じだと言いつづけてきた。おかげで学会などでもラボのメンバーはよく質問しており、私はニンマリする。大学の教育においても、最も大切なことは質問を引き出すことにあると私は思っている。質問をするとは、即ち能動的に聞くということに他ならない。

先生が親切になった。ちょっと親切すぎるのではないか、なごとも思う。親切な教師はいい教師なのか、という疑問を持つのである。少なくとも、大学の先生については、と付け加えておこう。

大学生になっても、教室の雰囲気は高校までとほとんど変わっていないように見える。みんな熱心にノートを取り、寝ている学生以外は雑談もなく聞いてくれている。講義が終わればさつさと次の講義へ移動する。これでもいいのだが、これでもいいのかとも思う。学生たちは教師の言うことを教科書を読むのと同じように聞いているのではないか。先生の言うことは間違

っていないと信じているように見える。

大学生生活4年間の最大のミッションは、先生の話をしっかりと覚えることに専念してきた高校までの習慣を捨てることにあるのではないか、そうあってほしいと、私は思っている。

私は講義では教科書を使わない。参考図書として教科書的な本を指定することはあるが、自分では使わない。教科書に書いてあることは教科書を読むほうがはるかに効率的である。

大学の教師は、教科書にはまだ書かれていない、自分にもまだ十分にはわかっていないぎりぎりのところを学生に伝えようとするところに、その本来の使命があると思っている。それが魅力的な講義になるはずだというのが謂わば私の信念である。



私の同僚であった吉田賢右先生は、「どんな教師でも三回質問すれば答えに窮する」と言っておられた。真実だと思う。質問する。先生が答えられる。それに対してもう一度質問する。それを三回繰り返せば、先生と言えども誰も自分では答えられない領域に踏み込まざるを得ない。私は吉田先生の名言だと思っている。

まさにそのようなぎりぎりの線で講義をしている教師にこそ、魅力はあると言つべきだろう。間違いないことだけを伝えていく先生は、いかにうまく教えられても、親切で丁寧でも、魅力的だとは言えないだろう。それを見分けるには、まず質問を試みるのである。

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人